

平成21年6月26日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006年度～2008年度
 課題番号：18520502
 研究課題名（和文） 中世伊予における高野山参詣と弘法大師信仰に関する基礎的研究
 研究課題名（英文） A Fundamental Study about Visit it in Mt. Koya-san and Kobo-Daishi
 Worship in Middle Ages Iyo
 研究代表者
 川岡勉（KAWAOKA TSUTOMU）
 愛媛大学・教育学部・教授
 研究者番号：90186057

研究成果の概要：本研究では、高野山上蔵院文書を手がかりに、高野山と伊予の大名・領主の交流の実態を分析し、まだ十分に解明がなされていない戦国期の高野山と地域権力・地域社会の関係を考える上で貴重な成果を提示することができた。また、四国遍路の起源とされる衛門三郎伝説で知られる51番札所石手寺の史料を調査し、当寺の信仰の変遷を探る中から、衛門三郎伝説の成立時期やその意味、多様な信仰が弘法大師信仰に収斂されていくプロセスについて検討を加えた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	540,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史

1. 研究開始当初の背景

- (1) 16世紀（戦国期）は高野山参詣が活発化するとともに、それまで一部聖職者に限られていた四国遍路が大衆化する時代であるが、高野山と四国の関係についても、四国遍路の実態についても未解明な部分が多い。
- (2) 高野山参詣の活発化と弘法大師信仰の広がりを考えていくために、高野山側に残された史料と石手寺など四国側に所在する史料を調査し、両者を突き合わせながら、高野山と地域権力・地域社会の接点を探り、その関係を解明する作業を進めていくことが求められている。

2. 研究の目的

- (1) 本研究では、第一に中世伊予の人々と高野山との交流の実態を分析し、高野山が中世伊予の地域権力・地域社会とどのような関係をもっていたか探る。
- (2) 第二に、伊予における弘法大師信仰の広がりを検討し、本来は多様であった中世伊予の仏教信仰がいつ、どのような過程を経て弘法大師信仰の肥大化へ結び付いていくかを検討する。
- (3) 以上の分析を通じて、高野山参詣の活発化と四国遍路の大衆化が生じた要因を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 高野山金剛三昧院には、戦国期の伊予の大名河野氏が宿坊と定めていた上蔵院の古文書が130通余り所蔵されている。本研究では金剛三昧院の史料調査に取り組み、古文書の原本確認と写真撮影および採寸を行なった。また、伊予史談会文庫・松山大学西園寺源透文庫・東京大学史料編纂所・九州大学文化史研究所長沼賢海文庫に所蔵されている上蔵院文書の写本についても調査を行なった。
- (2) 石手寺をはじめ、高音寺・無量寺・天徳寺など、愛媛県内の寺院に残された中世史料の調査に取り組み、各種史料から得られる情報の読み取り、写真撮影、データの整理と解析を行なった。
- (3) 以上の調査を通じて収集した史料は、整理・翻刻をした上でデータベース化を行なった。そして、これをもとに、分担研究者・研究協力者と議論を重ねながら、内容分析に取り組み、分担して多角的な考察を加えた後、研究成果を論文や報告書などにまとめた。

4. 研究成果

- (1) 高野山上蔵院文書については、報告書『高野山上蔵院文書の研究—中世伊予における高野山参詣と弘法大師信仰に関する基礎的研究—』（川岡勉編）を刊行して研究成果をまとめた。この報告書の中には、川岡勉「高野山上蔵院と伊予」、定成隆「上蔵院文書の研究史と収録状況について」、定成隆「上蔵院文書の古文書学的考察」、西尾和美「天文伊予の乱再考—「高野山上蔵院文書」を手がかりとして—」、西尾和美「高野参詣と上洛—天正十六年の河野通直母等連署宿坊証文をめぐる—」、桑名洋一「「河野家御過去帳」に見える伊予の戦国期領主」の6本の論稿が収録されている。

この報告書では、まず上蔵院文書の伝来経過と過去の調査状況を整理するとともに、原本調査で得られた法量・紙質・墨引・封式等の知見をもとに、古文書学的考察を加えた。その上で、河野氏と上蔵院の師檀関係の成立過程、河野氏による宿坊証文のもつ意味、上蔵院主・代僧・使僧らの伊予下向の実態、伊予国内領主の師檀関係と高野登山の状況、河野氏滅亡後の伊予と上蔵院の関係など、戦国期の高野山と伊予の大名・領主との交流や音信の様相を具体的に明らかにした。

上蔵院文書の第二巻は、他の巻物に比べ特別豪華に仕立てられており、河野氏当主や家臣の宿坊証文が収録されている巻物であるが、従来の研究では写とする評価が

なされてきた。しかし、本報告書では正本とみた方がよいことを主張した。これは原本を実見することにより得られた重要な成果である。また、天文13年(1544)の河野弾正少弼通直の高野登山が天文伊予の乱の勃発および収束と密接な関連をもっており、極めて政治的な意味合いをもつものであったことを明らかにした。天正16年(1588)の河野牛福通直母等連署宿坊証文については、従来は最後の当主通直死後に作成されたため実効性に乏しいものと評価されてきたが、この宿坊証文の作成には河野氏復興の意図が込められていた可能性を指摘した。とくに、この宿坊証文に名前が見える平岡太郎通賢を、通直に代わる一族・家臣団の結集の核となりうる存在として位置づけようとする動きがあったことを論じた。以上のように、上蔵院文書の調査と分析を通じて数多くの新事実を解明することができた。本研究によって、上蔵院文書が戦国期伊予の地域史に新たな光を当てていく上で、極めて重要な史料であることがあらためて明らかになったと言えよう。

- (2) 愛媛県内の寺院の史料調査によって得られたデータや情報からは、弘法大師信仰の歴史的変遷について考察を加えた。とくに四国遍路のルーツとされる衛門三郎伝説が残ることで有名な石手寺については、天理大学の吉井敏幸氏の研究室や愛媛県内外の博物館・資料館等の研究者と合同で石手寺宝物調査団(総勢22名)を結成し、宝物館に所蔵されている古文書・棟札類・甲冑・瓦・土器・菩薩面・工芸品・民俗資料等を総合的に調査し、目録化の作業を行なった。そして、同寺に所在する仏像の調査データとあわせて、『熊野山石手寺宝物調査概報』を作成した。中世伊予を代表する寺院である石手寺が所蔵する史料についての基礎データができたことの意義は大きく、これをもとにした正式な報告書の刊行を今後に予定している。

今回の研究成果として、石手寺に所蔵される古文書・棟札・絵図などを手がかりに同寺の歴史的変遷を論じた論文、川岡勉「中世の石手寺と四国遍路」(『四国遍路と世界の巡礼』に収録)もある。この論文では、石手寺の由緒を伝える根本史料である永禄10年(1567)の刻板文書を分析し、古代・中世の同寺には、白山信仰・薬師信仰・密教・熊野信仰・阿弥陀信仰・弘法大師信仰・三島信仰・時宗・律宗など、多様な信仰が存在し、時代とともに新たな要素が付け加わってきたことを明らかにした。そして、衛門三郎伝説の成立を戦国期や江戸初期に想定してきた従来の学説を批判し、伝説の起源が中世前期までさかのぼる可能

性が高いことを指摘した。弘法大師信仰の広がりを前提として、石手寺が熊野信仰に染め上げられる過程で、衛門三郎伝説が普及し、寺号も安養寺から石手寺に改められていくのである。こうして、戦国期には四国遍路を代表する札所寺院となり、岩屋寺と並ぶ大師信仰の拠点として世俗の信者を獲得したと考えることができる。中世伊予の地域寺院を詳細に論じた研究が従来ほとんど存在しないだけに、本論文は貴重な研究成果と言える。

このほかに、無量寺・国分寺・光林寺・光蔵寺・宝積寺など、今治市周辺の大般若経奥書の調査も行なった。これらの大般若経奥書については、戦前に調査がなされて1940年に『愛媛県越智郡諸寺大般若経奥書調』という小冊子が刊行されているが、今回の調査はそれ以来のものであり、奥書をすべて写真撮影し、大般若経の現存状況や奥書から読み取れる情報を整理してデータベースを作成した。この作業を通じて、戦前の調査データでは検出されていない奥書を数多く確認することができた。研究成果の一部は、川岡勉・國政和弥「今治市無量寺の大般若経奥書について」として公表した。

- (3) 本研究では、高野山参詣の活発化および高野山と地域権力の関係緊密化が四国遍路の大衆化と時期的に重なっていることの意味を考察したが、上蔵院文書からは四国遍路に関連する情報を引き出すことはできなかった。これは、高野山参詣と四国遍路には巡礼構造上の差異があるためと考えられる。小嶋博巳氏の研究を参照すれば、高野山参詣は往復型（単一聖地型）の巡礼であるのに対し、四国遍路は回遊型（複数聖地型）の巡礼と捉えることができる。高野山が地域権力との結びつきを強めていくのは、室町幕府一守護体制が変質し、地域権力の自立性が拡大する中で高野山側が諸国の地域権力に積極的に接近し、師檀関係に組織して経済的に依存する仕組みを確立しようとしたことによる。守護を中心とする戦国期の地域権力秩序に対応する形で寺社参詣のシステムが整えられていくのである。これに対して、高野山の関与が希薄な四国遍路の場合には、地域権力による統制の動きは見出せない。高野山参詣の隆盛と四国遍路の大衆化は同じ戦国期に認められる現象であるにもかかわらず、そのメカニズムには少なからざる差異があったと考えられるのである。以上の点については、まだ不明な部分の多い高野山の活動も含めてさらなる検討が求められていよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 川岡勉「天徳寺文書(乾・坤)について」、『地域創成研究年報』4号、22頁～33頁、2009年、査読あり
- ② 川岡勉「中世伊予の寺社勢力と弘法大師信仰」、『今治史談』14号、115頁～122頁、2008年、査読なし
- ③ 川岡勉・國政和弥「今治市無量寺の大般若経奥書について」、『地域創成研究年報』3号、43頁～79頁、2008年、査読あり
- ④ 西尾和美「天文伊予の乱再考―「高野山上蔵院文書」を手がかりとして―」、『四国中世史研究』9号、15頁～30頁、2007年、査読あり
- ⑤ 川岡勉「永禄期の河野氏権力と芸州―小早川氏による検使の派遣―」、『地域創成研究年報』2号、1頁～11頁、2007年、査読あり

〔学会発表〕(計3件)

- ① 川岡勉「中世の高野山参詣と地域社会―伊予における展開―」(第1回四国地域史研究大会)、2008年11月2日、愛媛大学
- ② 川岡勉「河野氏権力の変遷と戦国領主層1」(伊予の遺跡と中世史研究会第1回シンポジウム)、2007年1月28日、愛媛大学
- ⑤ 西尾和美「河野氏権力の変遷と戦国領主層2」(伊予の遺跡と中世史研究会第1回シンポジウム)、2007年1月28日、愛媛大学

〔図書〕(計2件)

- ① 川岡勉編『高野山上蔵院文書の研究―中世伊予における高野山参詣と弘法大師信仰に関する基礎的研究―』、愛媛大学教育学部、2009年、総頁110頁(執筆箇所：3頁～27頁、110頁)
- ② 内田九州男・小嶋博巳・寺内浩・西耕生・川岡勉ほか13名『四国遍路と世界の巡礼』、法蔵館、2007年、総頁232頁(執筆箇所：62頁～82頁)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

石手寺宝物調査団『熊野山石手寺宝物調査概報』総頁35頁(2008年)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川岡 勉 (KAWAOKA TSUTOMU)
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：90186057

(2) 研究分担者

西尾和美 (NISHIO KAZUMI)
松山市東雲女子大学・人文科学部・教授
研究者番号：80248343

(3) 連携研究者